

巻頭言

協同組合を広く知ってもらい、 未来につなげていくために

北川 太一 (摂南大学農学部 特任教授・本研究所理事長)

勤務校も含めていくつかの大学で協同組合論を担当しているが、内容をどう構成し、どのように学生たちに伝えるか、正直、試行錯誤の繰り返しである。学生たちには、生協をはじめとする協同組合が一般企業とはひと味もふた味も違うこと、現場で働く人たちが、組合員とのつながりを大切にしながら日々奮闘する姿を知ってほしいと願っている。このことを理解するには、そもそも協同組合がなぜ生まれたのか、時代背景とともに協同組合が歩んできた歴史を知る必要がある。先人たちの協同思想に触れることも重要で、こうした経過の中で協同組合原則やさまざまな事業・活動が生まれてきたことを理解する必要がある。

ただし、座学だけでは不十分である。協同組合が大切にしている考え方が、現場ではどう実践されているのか。より良い暮らしや社会をつくるうえで、今日これがなぜ重要なのか、実感することが必要である。

協同することに関心を持つ若者も、増えていると感じる。SNS を駆使して情報を収集・発信し、ネット上でのつながりを作る Z 世代と括られがちの彼ら / 彼女らであるが、やりがいをもって働きたい、地域に根ざした仕事がしたい、人と人とのコミュニケーションを大切にしたい、と考える若者である。こうした若者の意識を深掘りしていくために、近年では、より実践的な授業を行う寄付講座が注目されている。もともと寄付講座とは、大学等が、企業や団体によって提供された資金や人材を活用して研究・教育を進めていくことであるが、ここでは特定の科目を設けて、毎回の授業

に各種の協同組合・非営利組織から出講する実践家が講義を行うものである。

学生たちが、協同組合の現場で働くことを経験する取り組みもみられる。一般社団法人くらしサポート・ウィズでは、「つながりインターンシップ@協同」を開催し、協同組合の協力のもと、協同を学び体感することに重点を置いたプログラムを展開してきた。大阪府内でも、大阪府協同組合・非営利協同セクター連絡協議会(愛称: OCoNoMi おおさか)がコーディネーターとなって、府内の大学(関西大学、摂南大学、阪南大学、大阪大学)で寄付講座が実施され、さらに一部の大学では、協同組合での働き方を伝え、就職先としても興味・関心を持ってもらうための「キャリアセミナー」を実施し、実際に構成団体への就職に結びつくケースもみられる。

以上述べてきたことは、組織の外に向かっての発信、いわゆる対外広報である。しかし、協同組合の魅力や面白さを広く認知してもらうためには、何よりも協同組合に携わる人たちが、自らの言葉で、やりがいを持って働く姿をリアルに発信すること、そのためには、絶えず組織の中で理念を考え確認・共有する取り組み(対内広報)と働きがいのある職場風土の形成が不可欠である。

2025 国際協同組合年の目的の一つは、協同組合にたいする理解を促進し、その認知度を高めることであった。これからも引き続き、協同組合と関係機関とがスクラムを組み、協同組合の大切さを伝える取り組みの広がりが期待される。